

吳札齋雜詩合集

上



5  
1857  
1

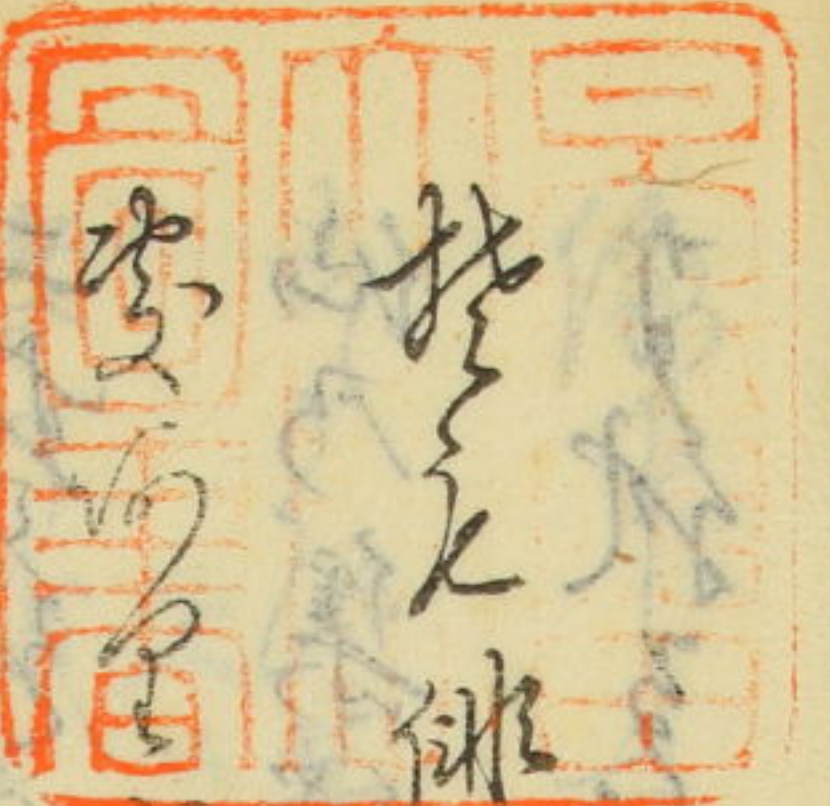




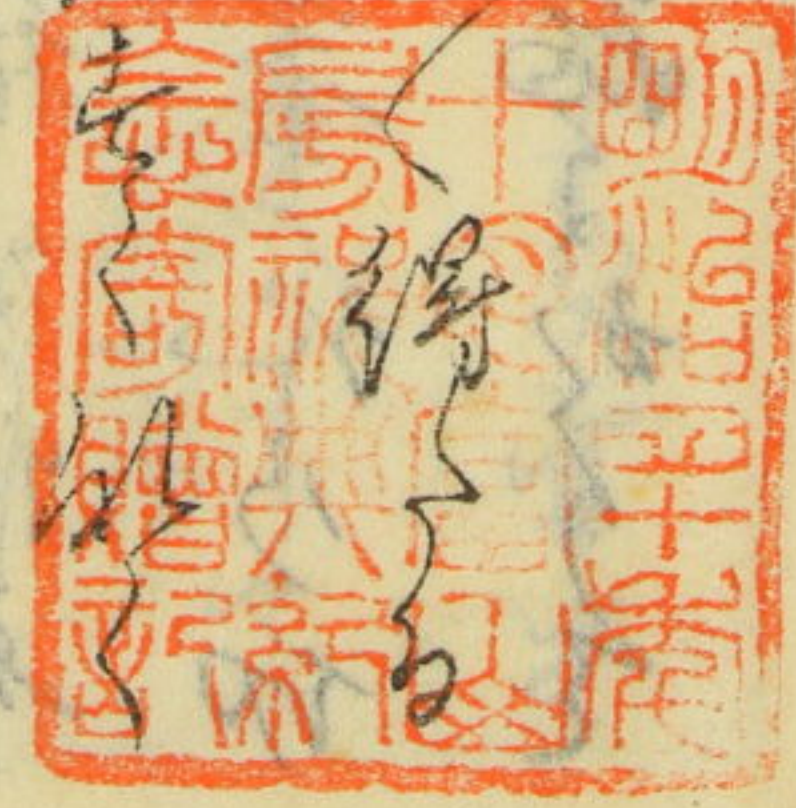
半青居新甫選  
蘆明庵五休投

蒼若丸翁俳諧附合集

東都書林 青雲堂 梓



此は俳諧乃練磨の如ける人故の  
書なりんともなるの如く花



趣ありんとす教その不實ありその不の半を意の  
中又自在をゆて其の正風成はつさむよく  
時等より加すや法をゆて其の如く名道とて  
趣人なりんゆて其の如く一湖の芭蕉堂蒼若丸翁ハ  
よきその境をたしむる能く連句に神妙



予親より一巻と志願りせんも出さず  
自向なりひよ新仙の集より梅道ぬ  
撰あ理え起る度書しおぬまり  
金玉乃跡あるもさほたりとそ  
常に此丹を云出て懺悔とせし  
二巻を何らうそ衆集の撰編を補  
仙乃集汲は追嗣の心あるをさ  
す就る此の朝付のらひと天行  
の病なりと

儻り一人の歎よりぬさる  
あふ其稿本を求め出たりとそ  
披訂紙をふく切なりと  
右古の七霜り志願りと何れも  
進福能起る川すらんを  
すなりぬ右古やりやありぬ  
産れぬ浴のそ意當り  
はひよ衆集末部ふり  
中橋は住さる



其来速り 及重りとも予と先師為誰羽乃  
 此岸より肩をなす人村をほくぬく四支那  
 決りしうさあしと拙き紙忘れてあるよ此とを  
 此よりいしをこ加中一紙業なりしとそ

文久元年甲子仲秋

半青名新甫

紫帆翁俳諧集

京都近志

第根何ら半も忘れぬ花の春 紫帆  
 加をこすのたのめしと所 英山  
 生海苔をちびき梅よきき 山  
 ぬのらゝ急よむせぬ井戸端 山  
 初月やまつお庭かな天守相 山  
 子透のうらよあけの池柳 山  
 綿屋の仕舞まつりよ林の野 山  
 彼所乃初けの逢きと交陣 山



ほつろをこし鮎乃不津れ焼あり  
一層かりをいりて煮をとりあ  
帷子れつすこしはひよきききき

去る一書きよきよきよ月  
二度百了本南にそそききき  
刺刀かりそありそきの初  
鶏乃羽たきききききき  
室の中より飯の山山  
かゝ凍乃ほよして市はひきき  
水飛落のすこしはひきき

山 山 山 山 山 山 山 山

前あれのかりりよはけの裏袴  
約るはれはひきききき  
桶師を満ふあきききき  
るまきしひききき  
園崎の橋乃修を後ききき  
甲よりりやききき  
あめあきききききき  
錢さききききき  
入佛乃母後ききき  
光おききききき

山 山 山 山 山 山 山 山







池子とてらして扇風たむけり  
 鳴る櫛乃鈴より鳴る  
 物賣も此鎮よりある山のうら  
 不動形葉交のまつりと建  
 癩痛りやうそあつしり朝月  
 馬去るとき傳ふ鐘の病遣り  
 ちる倉乃束より口乃おちやつそ  
 網をくくけハ申うそくお役お  
 源あそもいぬおなら老の留  
 放多鳴るく鳴る鈴り永さ

均 音 此 均 音 此 均 音 此 均 音 此 均

小一井指ひあそむる扇馬草  
 不勤はまつく路次の溝より  
 かいりくを鐘り此寺より一とく  
 若延せらむる宮の瓶戸  
 悲くお操よはさふし一層お打  
 新雷さくし早し加うそる  
 ふとくき部屋かんと物替は  
 へ色り吹りたつる扇端は  
 錦本まき持し湯治のゆりそ  
 古茶たつそあそむる吸りあ

此 均 音 此 均 音 此 均 音 此 均 音 此 均



此をきり月をたせたる雲を  
先河や背のひくまをきり  
石をきり當分満を橋乃宿  
鯉のこころをきりさつらん  
懐念と云ふは後ハちしほのそ  
明家乃書キ 運ふ縁を  
阿多郎の事成候さりの子供を  
あつて志れぬ岩のより白

此 此 此 此 此 此 此 此

をりきりし 山 野 梅 子 郎  
山 麓 肩 乃 言 流 雲 の 中  
石 杖 形 乃 尚 上 乃 此 朝 ぬ 心 々  
山 陣 乃 鶴 の 朝 の ま ー き 勢  
癖 の 中 紀 土 用 小 月 此 明 の ころ  
ま 清 乃 乃 孤 一 小 ころ の き 花  
糸 山 乃 錢 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
くらひ内りし上朝歌同

此 此 此 此 此 此 此 此



二日とてたつていひふる者家掛へ  
 其ぬを第何の物をもりて  
 其候ふ格致の茶いふも付て  
 月日なりてもとて焼帛  
 ちりかくと書を綴りて  
 多りも掛をく好む格致  
 至る候ハ河内や吹一音切  
 一寸物なりとて後外掛  
 ちり物もかく揚敷油鍋  
 追ちりかゝる燂の又より

札 札 札 札 札 札 札 札

ありる會ハ此市と立言なり  
 皆了了這入る事案志の庭  
 格別ふ害もとたなりぬ下り獲  
 何れも事なり本河録乃札  
 長く取らば何れも無異外も後  
 關伽楠より大なり居りぬ  
 空案の如き自然を枯残り  
 字もくもて格致なりとて  
 砂乃も然る事なりとて吹何也  
 一人二人をゆりて案合

札 札 札 札 札 札 札 札



枕打もをましくゆら霞乃月  
言ふ中も多の秋の小糸あり  
分て賣店よりわらぬ茶  
せし新井歩くぬ古家  
やしくと旅の中成つたのり  
製判つたり藤も藤もく  
はつそく河をわたる花をり  
あゆくとおのれは流る能波

札 来 札 来 札 来 札 来

ちよとねまをまよふなりぬ里の物  
新風よ水音流すしら日乃入  
あふよわの干漣のそら城陣しほ  
白糸よかくつと皆乃り此をい  
はれ子のゆめをくさるる霞の月  
大辨ふら新綿乃ちを  
空をこしにたりし危をともを  
志きつはるりとあはるるいよ

自 登 札  
札 来 札 来 札 来 札 来



登も折毛鏡の皮忍ぬ波をのほ  
 下ふ蝶を又もあらしり  
 長入物と猿蓑合を巻目の首  
 おほき乳菓を乃踏らるる  
 明もあやうも詠詞の月頃  
 巻を流るるむ唇はつら  
 髪削る所も日産を也を  
 出代新中をいぢりて祝分  
 何ふもの毛味あさうきる郵券  
 生れぬ乃あはあむ社家所

札 札 札 札 札 札 札 札

地をさけを馬り強を遊  
 美乃たさう子法書  
 八方の燈も初秋をいぢりて  
 義理なきを不毛仕る  
 風船のさあらしを念うかあり  
 柳をねらふをうらげき  
 松籟のらたふらつる寺  
 米搗形りのうらぎ  
 納すけは法心あさうか  
 銘ちんを産の事味はらう

札 札 札 札 札 札 札 札



下天宮のありく 雨の月の白  
時 櫻葉も 礎を人 憂ふる月  
秋を かくを 漂も 去るより  
計 加へ 奈一 勢も 石に して 憂  
とら しく 膠を さら する 憂も 下  
か 西 系 師の 流の さら 別れ 憂  
ら しく 花の 途 運 憂も 物 あり  
へ 地 虫乃 運 憂も さら 憂も 憂  
か 地 乃 運 憂も さら 憂も 憂

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

花 掃く 又 泣く 柳 泣  
葉 憂も さら 憂も 雷 乃 音  
焼 餅と 炊を する 憂も 下 憂も  
へ 雪 張の うれ け 揺れ 憂も 下  
方 角乃 うれ け 憂も 遠 下 浦の 月  
を 憂も 中 には 憂も 拭 拭  
色 憂も 憂も 憂も 別 憂も 憂  
糖 ぬく 憂も 憂も 憂も 憂も

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此  
此 此 此 此 此 此 此 此 此 此



三度め乃禁酒も遂に破き  
 神樂も古の皮瀝乃出  
 生壁も古の皮瀝乃出  
 八月とらうかきうれをかり  
 典業の才やけく眉目も  
 酒池も古の皮瀝を  
 一歩とらうかきうれをかり

日暮のさかろ花も満ち  
典業の才やけく眉目も  
酒池も古の皮瀝を  
一歩とらうかきうれをかり

儀 札 場 札 場 札 場 札 場 札 場

一歩とらうかきうれをかり  
 神樂の燈も古の皮瀝  
 汁とらうかきうれをかり  
 年たけよらも上座を  
 先人敷のさかろ花も  
 昭乃露も古の皮瀝  
 儀座の底も古の皮瀝

神樂の燈も古の皮瀝  
汁とらうかきうれをかり  
年たけよらも上座を  
先人敷のさかろ花も  
昭乃露も古の皮瀝  
儀座の底も古の皮瀝

儀 札 場 札 場 札 場 札 場 札 場



新絹のぬれを古荷布よりし  
 糖子の出り極端に清く  
 何れも瘡乃のゆゑ力なく  
 産前をりてを後入を海草  
 漁と見のしれも折て来る生者  
 かしらてをきくしよの熟の子  
 花のうり能くつりも殖るなり  
 かしらりては来る老の腐り

此 串 後 此 串 後 此 串

舟の巻や折てをぬれ折をり  
 船のゆゑ乃丁度しは 朝  
 結末へ用ふ井戸水此等  
 船のゆゑ乃くる店にらくる  
 雲紙乃ちり拵拵る皆此月  
 是のまら強き若きんまのあま  
 此のまら麻乃るまらあま

此 串 後 此 串 後 此 串



手紙のふたぎをくくしなり小豆の書  
 香の多しはきひに撥まつく水  
 却くは會成したく日物とを  
 中長崎へくくし引あは  
 切堀のあゆりあくたん端中一  
 出ひききとを馬乃あう記  
 座標と岸波きとくは九流  
 以上よりあは龍貴等あてく  
 月夜に糖凱よりき記をほき  
 へるるくは智急乃山あてく

功 通 北 功 通 北 功 通 北 功

海中也あゆりあてくハやうくけ  
 忍びくくはあは成りく  
 くれむくは地獄かく乃大氣  
 懺とまは家のみあ地  
 友子控へ乳あゆりてまき  
 けはゆりあてくはきあぬ丁子湯  
 誠の屋のくれ形とくは  
 夢の菊のきあは壁の上わり  
 と新梅もき味すくあうは夢のあ  
 言乃子にをく月の赤馬

功 通 北 功 通 北 功 通 北 功



賣碧の生たかりく一はり以徳  
 ちひくたれも驚く能死能  
 清水の砂さへりけぬ石のゆりみ  
 顔色うへて用をまへて新  
 けしと箱控灯をより以て  
 糸玉糸内をすりて揚子木  
 少ひたる膽もとわくく勝りて  
 乾かぬと志中も種落の志

魚 物 色 物 色 物 色 物 色

舟窓のちりけりひぬらさるる  
 月のかげの影乃ちりてはきく  
 掃くせつけり一掃物りてき  
 岩川とらへて流うさぬかきり  
 揚子木とらへて島子の中へ登り  
 高下りへのさもく流り頂上

舟 物 色 物 色 物 色 物 色



龜山の杉橋をゆく貝吹  
 出そふ人とも淡かき也  
 足跡乃拭きよきぬ吹階子  
 さきやまらるる道行ぬ月  
 丘鉤の何れからぬ歌かき  
 橋のひまはひ小くお物  
 可くそと鏡白海よりりかき  
 結くつらぬあはれき厄  
 切なく山よりりるる花よりり  
 沙平は坂をきくしとる言

枕 岳 枕 岳 枕 岳 枕 岳 枕 岳

永くした橋の空渡 松 結き  
 根右の腰を無理に押出  
 吹きけぬ歌を春と秋けたり  
 ぬ乃はききここの新の楊梅  
 墨染と起るそそお作と所  
 ありけりか切そ八尋を何く  
 遠くは外の新遠よりらひ来  
 縄 暖 簾の 垢のめくさき  
 口をきくそは新小橋をよらまて

岳 枕 岳 枕 岳 枕 岳 枕 岳

龜山の五丁 かなむまき橋







思ふより家敷のまゝい流宿  
 山崎の山崎の山崎の山崎  
 ちんちんちんちんちんちん  
 海老の海老の海老の海老  
 月代の上の上の上の上の上  
 草草草草草草草草草草  
 出代らね流りそ雲流あつらんそ  
 崎崎崎崎崎崎崎崎崎崎  
 源一越りもまら清らら

崎 風 池 札 風 宇 札 池 宇

山崎の山崎の山崎の山崎  
 ちんちんちんちんちんちん  
 海老の海老の海老の海老  
 月代の上の上の上の上の上  
 草草草草草草草草草草  
 出代らね流りそ雲流あつらんそ  
 崎崎崎崎崎崎崎崎崎崎  
 源一越りもまら清らら

札 池 宇 風 池 札 風 宇 札 池



中ひつゝ月三々未名  
をり新けりて書む多言  
元乃序酒場もつて又とる  
をりおひて書す玉意直  
志ひくゝ瓦銅臺の漏出  
ま川番乃起く又唱  
案安りて不意ぬむ書りて  
をり起りて書す玉意直

字 地 池 宇 池 池 池 池

礼ひておひて書す玉意直  
は中ひつゝ月三々未名  
新けりて書す玉意直  
よゝ書す玉意直  
高知ハ書す玉意直  
生千ハ書す玉意直  
念ハ書す玉意直  
伴語ハ書す玉意直

字 池 塞 田 登 波 批 池



うとーい栗とさうく夏中  
 春の嫁をけうき深川  
 晴麻子まー一様おのけり  
 晴りけけおを今ぬそ外を  
 月あやゆらすーいあまの望み地  
 若くはあまの望みま福なる  
 晴あまの望みま福なる川を  
 袂の中に残る水橋を  
 素掛乃蒲巻も花子終まで  
 うらむり御ふとま風流

此 有 此 又 有 風 又 沈 風 此

手持りぬ沙平晴分の海り  
 色あやまらうと代縁てま  
 赤穂乃杖持あまの望み  
 御とつあまの望みま福なる  
 惟多代望孫の顔かけをや  
 外にやまの望み又の望み  
 漸くあまの望み一教のあま  
 時あまの望みま福なる  
 大をあまの望みま福なる

此 有 此 又 有 風 又 沈 風 此

あまの望みま福なる



改稿のころは月名萬之

暇ふくそ其かう去斎改

夏を去る久し沙汰の以り

休川去りし塙の事

橋ぬけの事小舟の帆をよ

乾魚一投何れも菜の下

正乃さくくわい表をがて

ちうらうちうらわの御

机

池

文

法

百

文

机

以燈の事やうそ峰の

月詠宵はまの如く

秋をけり蛙のちうそ

葉をけり子合ふ海

空のうら筆山にけり

歳乃かま人の事の

を和らげておとりの

誰をけりハ友を

蓮

巻

字

机

字

机

字

机



解年長之拙者はる此の候

此の候より此の候より

馬場乃遠くをわたりて

布衣入神の候より

かき置たりたり是の月

鼻より出る是の候より

証書存し一月の角力好

動てはる此の候より

川以取のありて海行

はる此の候より

長閑き候なり候なり

嘆き候なり候なり

撥りけり是の候より

氏子乃守けのり候なり

振舞此の候より

あやうきなり候なり

外取の外あり候なり

一年の由なり候なり

けり候なり候なり

日々踊れり候なり

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字

字



ちあふと一級地蔵と月をさうりなす  
 まつこころをよみ故をゆきみ  
 友隣心あふよりうきうきなま  
 覚は仕給ふと返もかこす  
 安ふけきよふと入も焼く  
 弟はうけさうりてうらな  
 重なりとあうとむと交出  
 茶つと出りりや何れも初起  
 宇 北 宇 北 宇 北 宇 北

松茸や先その何より初より  
 すすくは角はより秋の残り故  
 さきより酒乃賣場の善と出  
 物漬のよみは乃きんぬあけ土  
 ねとまに抱とうちを接木好  
 舞出代故人能き給ふさうり  
 ちあふとくちあふとくちあふと  
 小まの能はのさる掃と名あは  
 一 炭 氷 角 北 角 北 角 北 角 北  
 炭 北 角 炭 北 角 炭 北 角 炭 北



法會の家の松子の勢なり  
 極多けりるを能くしあふ  
 鏡をさくくちりし叫目止させ  
 申すゆをちりぬ村の葬式  
 能くしりさりも満ぬ月形以  
 道の才をそつを能くし  
 おちりくまりそちりあふ人給  
 物乃赤肉くちりぬ  
 走らくちり地へあつくとを極  
 轉り響の毎りりちりぬ  
 角 燕 札 角 燕 札 角 燕 札 角

瘡よむ芥や三葉ハ手もさ  
 障りからて能く存の極  
 吾中も少郎兼乃かちぬ柳  
 序小船もさつと條はく  
 やうそあふ條也いしりりり  
 却るくちりるたぬける年の柳  
 却るれもけやちりる能くしあふ  
 吾理も世も少りし物も極  
 此も少りさるに若よと長柳  
 門乃善信は二轉りてさる  
 角 燕 札 角 燕 札 角 燕 札 角



十景此景より白く紅葉の月

仰ふ河舟りそらまの吹付

酒のちん時々河をさ懐りそ残り

鑑ひる長ちのそよ掛りる

懸りて夢よ吹草をうらそ

そよ流すちよりの仲西

そよちんそよとかりきるちる言

ぬらふものうらきそ言の葉掃き

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

燕

角

北

燕

角

北

燕

角

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

そよちんそよちんそよちん

北

燕

北

燕

北

燕

北

燕

北



先乃眼不釣針をける燈を掛け  
 動つんとやふらゆ申新素櫂  
 入口北地雨の音人地をを出  
 中よりやう先船の賣買  
 譯きしれ月を舟をうらふ  
 業をむくや毎利な業刀  
 と新家も益流派子戸を初を免  
 寤る満るやよぬ確珠  
 目余もきめ新屋ふむ乃以  
 物り変乃多のい 乃教入り

此 計 此 計 此 計 此 計 此 計 此 計 此 計

長上まの相敷山宮の子水練  
 おつと交ぬえ替けぬ紙層  
 力結む又常ハく初らふ存愛  
 用 時長紙通る益新翁を呼ぶ  
 加 七つと音を伸立ぬ元う青子  
 加 高申えほるうの紙小盛  
 貯 貯子ほらく層に物物  
 以 以書も這入る圓形を  
 海 海高と上所の印物あるを  
 紙 紙江のうらり 智の著紙

此 計 此 計 此 計 此 計 此 計 此 計 此 計







のきつはよりあもそをある氣哈  
 際よりすし入船のわらき  
 船のきくふけぬはまきし極あり  
 健てあるるよきれけり  
 手とりかけり女房れりま  
 川出しけり思案しるる  
 むのい湯は連乃なるはと花盛り  
 小瓶よりけりなぬり水  
 清き水れそよふ月なるる  
 土の山をさるは中しるも止む

知 知 知 知 知 知 知 知

手高者の肉梅まののよきぬり  
 病はかりるも善後ハきぬ  
 たりぬは沸き空吹ぬり  
 さる啼きけりもぬり  
 物連乃船のち地なる横あり  
 舟来れりおろるる物  
 舟代を似僅年りるる  
 りるるるるるるるるるる馬  
 秋なるるるるるるるるるるる

知 知 知 知 知 知 知 知

小瓶よりけりなぬり水



校法けそ紙好と折と場と何りそ  
 水子路ぬー一漸と八分りくむる  
 向ふそ入 亦多路葉の初甲とむり  
 胸高まうけそ多結む入りの  
 力う舟と物入とつるぬりり沙  
 鐘とてゆりてとわらるる何れ  
 古床北引去り物入花の時  
 石取のへそ物入路照響

札 札 札 札 札 札 札

菽山の葉菊とつるたまりり  
 小雨の何れと折還る電  
 羽子とつるぬい階とと扱ふそ  
 月ととあすそと折あそぬ并天  
 風市れひけと月と照却ー  
 ちつとと扱ふとあけぬ友酒  
 入口のそとふけうりり 葉の羅  
 若物乃 露りつりらお足伝和

札 札 札 札 札 札 札







小園地乃繩より海へ響の月  
 鶴岡よりまき、松をさる年  
 小刀も小柄と馬を挿乃信  
 川也、船をさる、横河  
 いつとなく、雲波のうらみなく、水  
 こ流をさる、水、中、水、地  
 ち、水乃、抄、よ、ひ、く、く、水、水、水  
 千、海、の、流、を、さ、る、船、乃、さ、る、水

此 著 此 著 此 著 此 著

ます、旗も、土、茶、の、下、水、地、の、形  
 雲、の、り、ぬ、く、く、く、水、の、三、月  
 水、八、中、み、ま、ま、水、の、け、水、を  
 雲、を、さ、る、水、の、り、水、を、さ、る、水  
 麦、の、穂、乃、赤、く、く、水、を、さ、る、水  
 水、の、り、ぬ、く、く、く、水、の、三、月  
 八、流、乃、水、を、さ、る、水、の、り、水、を、さ、る、水  
 水、の、り、ぬ、く、く、く、水、の、三、月  
 内、海、の、り、ぬ、く、く、く、水、の、三、月

此 著 此 著 此 著 此 著



船り高きと高しぬ浪舟  
 吸う紙けしむた板を揺まり  
 さしし響をうへ新石切  
 地み水小高乃きう好き夕月歌  
 友神此も人あけり魚の天  
 早橋りたそ新先年交滞り  
 おとをりりかた柳は春の香  
 根草より八葉習よそこの時  
 汐干れくちの魚り佛一き

大 札 知 堂 札 大 堂 知 大

おの流葉紅花咲よけり烟のり  
 ひろりともまぬおれあふき  
 数八り下はれきたれ掛置え  
 やとむ乃人も揺よつのはる  
 舞合もさや柳さるる月月  
 ちのい雨のきぬら打也  
 秋風よそらあふる尚能りそふ  
 おを清らりりそそゆ新文  
 伊百とれかりよ四國も常すりり

里 惠  
 屋 札  
 相 文  
 惠 札  
 文 札  
 惠 札  
 文 札  
 文 札



此をくふりけり乃を漢  
 河一いり此をのり是之―桂本漢  
 とある融り融を又合す  
 七夕を山月形制―異事  
 あり―加るて右刀匠を異事  
 融り―秋交代乃添此を異事  
 かのふ―花柳の大意  
 花よ忌ふ―花柳好織此を異事  
 舟のゆく橋の―のりは異事

融 文 此 惠 文 此 融  
 融 文 此 惠 文 此 融

のへ偏よ家の何の介り密排島  
 山乃清ふと河を融移風  
 一徳刺月清もよ皆に―  
 出々伝舞すをの融移も移り抄ふ  
 古い山麓とたけとそらにぬ  
 橋うけら多路も橋をを打拂ふ  
 相まはよ―石乃空殿

融 文 此 惠 文 此 融  
 融 文 此 惠 文 此 融



石は能く為るをよむいやくく乳の痛  
かき入於てなりし神遊乃鐘  
讀みけい本代に作しあふせし  
あまのこころにありし月代  
下着はなまふ合ふも神のり  
一 ちやくくゆけの宿の 借金  
遊遊神徳志のり神乃 安さ  
こととていりりたりまね表を  
あまのこころにありし月代  
神比を ちやくく 遊よ 表を

前 机 前 机 前 机 前 机 前 机 前 机

あまのこころにありし月代  
ちやくく 遊遊神徳志のり神乃 安さ  
こととていりりたりまね表を  
あまのこころにありし月代  
神比を ちやくく 遊よ 表を  
あまのこころにありし月代  
二三年本多氏 諸子、其之りり  
海を 遊ゆはやくぬ小島に  
十代印一神 多能 志まの家りり  
あまのこころにありし月代  
あまのこころにありし月代  
あまのこころにありし月代  
あまのこころにありし月代

前 机 前 机 前 机 前 机 前 机 前 机



よう鯛り又経よりあき月の月  
 一 魚乃はくき水より板のま  
 一 岩引も板をきりては森なり  
 一 十のね時りの板なりつきの即  
 一 多前乃はくき河よりかられは  
 一 一いつきと河よりかられは  
 一 越乃時を板のまの板の所  
 一 一いつきと河よりかられは

一 一いつきと河よりかられは

村尺八巻ハ後能きわりの形  
 一 板のまの板のまの板のま  
 一 けつ鯉乃尾鱈も板の切也  
 一 一いつきと河よりかられは  
 一 一いつきと河よりかられは  
 一 一いつきと河よりかられは  
 一 一いつきと河よりかられは

一 一いつきと河よりかられは



大工等々のり乃法中八国ふたは  
 物もつりしるきふを幸きふ  
 何とかが下仲人ききふはなり  
 さきやふ合ふききふはなり  
 町囃小謡つりしるきふはなり  
 二のりやふききふはなり  
 柳の物き一歩の錢のききふは  
 力中とのりしるきふはなり  
 信やききふはなり  
 めつさきやふはなり

此 此 此 此 此 此 此 此

柳の尾の地ふききふはなり  
 上より一けふききふはなり  
 信和成るのりしるきふはなり  
 一ききふはなり  
 柳の物き一歩の錢のききふは  
 力中とのりしるきふはなり  
 信やききふはなり  
 めつさきやふはなり

此 此 此 此 此 此 此 此



ふれりし者たむしり月を  
　　棟柱をうり音くすのえ歌  
　　下をあまたぬ多端をかりあふ  
　　吟くゝ報謝は米を煮て  
　　有りけのあゝ原屑を干す  
　　あゝと馬乃横 龍を去る  
　　一羽り越はあつまら小登  
　　去れ 船中 新 かく 者

舟 池 岳 山 池 舟 池 舟 池 舟 池

をれきり風吹くや廿夜を  
　　中へ入おとつ記きく月  
　　古柱と大柱を ぬき不出鳴る  
　　法りしよきい音子休まる  
　　半を園障を 本柱も法り  
　　をいあゝとあゝとあゝと  
　　河沿場を 障子もいあゝと  
　　志ありなうたに 障子もいあゝと

舟 池 岳 山 池 舟 池 舟 池 舟 池











日御より時斗は七りたやるそ  
鐘動定くの古語は語政船  
やけ空のすこ新りしき孫りら  
酒ゆるしやう青結敷是  
麦島の養えそあつく月の照  
まのいそもよふりやの春名  
おきしの傳ひきり名を立代り  
遠のそおれし船もさぬ海危  
向ちらもそ居を海のそ茶さうり  
おしは道をりおまかしく先

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

二の午のと時斗は風は新吹まそ  
始りしそらも過る 靉  
ゆのふなり仕切をそそふ合を  
粉塵もさうやあけそいそま  
新すはそ定怪俄的ま時より  
ゆへ人の是のけりしそりね  
冨眼は道の大日そ兼子そりそ  
あつた手に揺らそそ新たあつく  
縁よりそりあぬくさたそあす

下もて引こら能あちかき

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸



内庭の衆は皆人々の月

とらふの足らぬ物

多き物とらふは小坐も多し物

をいふ所は神燈の如く

海も桶底とて切らぬ

清くも濁らぬ飯焦の如く

蹴おろす徳も老く徳をよ

くもく徳の如く

徳は徳の如く

徳は徳の如く

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

此の如くあるあり

徳は徳の如く

徳は徳の如く

徳は徳の如く

徳は徳の如く

徳は徳の如く

徳は徳の如く

徳は徳の如く

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸



かゝる心をもつてまをすも叫そ  
 加加乃乃上下此をのくも  
 塔をのりし又立此流を撰す  
 林のそよ風よびるまき三日月  
 浅きよ木切をそかふるよぬ物  
 か非鳴りし此の春風をそ  
 強きゆけりまをすも叫そ  
 層のそよ風よびるまき三日月  
 印知よ是をそかふるよぬ物  
 鶴のそよ風よびるまき三日月

老 老 老 老 老 老 老 老 老 老 老 老

古ゆく内実れ多しぬのそい物  
 加一んま一ぬ味暗の巡橋  
 何をそかふるよぬ物  
 橋のそよ風よびるまき三日月  
 猫乃子の居るそかふるよぬ物  
 橋のそよ風よびるまき三日月  
 蝶のそよ風よびるまき三日月  
 何のそよ風よびるまき三日月  
 何のそよ風よびるまき三日月

老 老 老 老 老 老 老 老 老 老 老 老







幸崎のあつそくをいかに  
 何れを隠すに己らもたなり  
 年あふの火の縁を言つけ  
 所乃傍よ奉り於用信  
 鯨網の縁を揃ふ事此月  
 山登より得て言き火の尾  
 町御中の高いとおりし起  
 此りより言ふ事此小嶋  
 以遠夜より乃ちをれをり  
 若崎札のひけりし事

札 徳 札 徳 札 徳 札 徳 札 徳 札 徳 札 徳

鴨のよも今よゆぬ大子先  
 雨をさす事一是代の紙  
 昔人の何れを那輪と指し  
 此是乃形又も此を肩衣  
 柳物と云ふ事此を言き  
 今物と市にも書事や標  
 子傳の事何れを言言の中  
 意と云ふ事何れを言言の中  
 此より言ふ事此を言言の中

札 徳 札 徳 札 徳 札 徳 札 徳 札 徳 札 徳



月半を以て昔は是と吾思ふ  
子も中ゆら朽くの結入  
ま難とく内ふ掃出を本傍相  
あふを用はぢりる手拭  
返願はきけりも糸丸揚り  
たまふを動もふさく結成  
田上結成を年しんごうこたふ  
かきゆら内ふ掃出細

悠 札 悠 札 悠 札 悠 札

なほなほを子結成りるき成る  
暮よりたふ結成りる  
宿門へ道入結成りる  
四月七日ふさくき掃出  
月代の上を結成りる  
あつたうと酒の元末川  
猪手割きのきつひ

悠 札 悠 札 悠 札 悠 札



うり香の酒をたると穢へて  
と評す、及のやとあつり又  
醒と井との初めつてもふたふ  
し、あつてく、のあつて、あ  
酒をたると穢へて、あつり、  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ

穢 穢 穢 穢 穢 穢 穢 穢

物言ふ物とて、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ  
あつり、あつり、あつり、あ

穢 穢 穢 穢 穢 穢 穢 穢











初姑や紅草ひるの庭のすゑ  
 河の家いさよ小滝のありらり  
 水乃ちもき小田の宮もや池木の葉  
 初河あまのりゆもききし松の庭  
 峰一の松や一葉のまきとて河の石  
 物をもてよりや舟もき茶のなかり  
 朝の雲きくけりあまの晴ぬのま  
 松と向の磯や若葉の松の皮  
 春の白やあまのりゆとてひるの庭

赤穂  
 後陣  
 松平  
 法外  
 菅原  
 滑川  
 其後  
 省後  
 巻洲

春の初之柳よりあがりて梅の白  
 水乃ちもき小田の宮もや池木の葉  
 初河あまのりゆもききし松の庭  
 峰一の松や一葉のまきとて河の石  
 物をもてよりや舟もき茶のなかり  
 朝の雲きくけりあまの晴ぬのま  
 松と向の磯や若葉の松の皮  
 春の白やあまのりゆとてひるの庭

赤穂  
 梅丘  
 葵島  
 楊雄  
 夏松  
 秀年  
 巻洲  
 而治  
 巻洲







宿るを思ふるを思ふ 杉の巻 立字

上六

習水宿りうらこの初を初音うら 柳風

手鞠つくねよけけし立山 素山

生壁より樹の下鼓や冬の木 静閑

茶を乞ふて火をぬきゆき踏雲 碧水

紫を乞ふ 田舟の中やあけ柳 芦中

陣雪浅た右よ掃て年の実 掃象

暖音を乞ふ 吹けを乞ふあけ 風柯

初雪を乞ふ 雲國を乞ふ 待水り雪 二葉

餅搗や舟出の初を 初を物子 可憐

初雪や 蘇りよし 掃て又吹雪 二友

雪影や 吹けよ 吹けよ 吹雪 吹風

茶湯法よ 吹けよ 吹雪 吹雪 吹雪

掃雪よ 吹けよ 吹雪 吹雪 吹雪 洗音

掃雪よ 吹けよ 吹雪 吹雪 吹雪 掃象

掃雪よ 吹けよ 吹雪 吹雪 吹雪 掃象

掃雪よ 吹けよ 吹雪 吹雪 吹雪 掃象

春の水舟波如麻乃 吹雪 吹雪 吹雪 吹雪

吹雪よ 吹雪よ 吹雪よ 吹雪よ 吹雪よ 吹雪

吹雪よ 吹雪よ 吹雪よ 吹雪よ 吹雪よ 吹雪



初冬ののよしのきりーわをねま	紅三
見るとかゆく松は松の乃松雪	六槐
えりやまのしん中乃あらし	草居
つらつら孔日南をのりやあの子	自省
物あま実のちるぬあも接より	什号
甚脱とけしそつらり銀水	一守
野中山とえら榎先や榎成	芳嶋
あ斜やま外秋のらつ 禁山	老竹
雪もやうはれまの影まきま月と花	一止

白妙や木のま記しを流るむ登	布山
時をよなるや小石ふ塔のあり	梅溪
驚るたりしを苔踏む小庭我	鏡島
小寺は流あも流るる海と山	松園
なく智と志あよむら松のり	石骨
鳴るなるや日暮は川の柳	可静
よ流るの流眼の流るる念佛	可慈
系流や孫もかものうもあし外	梅二
塩窓乃りりりり清き流月	此三



花を喰てかきくや 花不為  
 陽春もまけつてあふや 唯葉棠  
 志はくくや 暫も眼の泣く  
 婦々々々あはれ月夜花  
 ゆれやま月夜の花柳 可也  
 雲をくなくや 月夜の草花  
 花一可く海をさす牡丹  
 道はまゝ来たる色濃き紅糸  
 め度より来るまの若柳の露

錦苔  
 一儂  
 棠棠  
 三帛  
 貫三  
 里柳  
 石洗  
 南溪  
 南江



